

ワクチンで感染症予防

低接種率 遅れる日本/制度を任意から定期に

大洲市・ごとう小児科 後藤 悟志

VPD ってご存じですか。Vaccine (ワクチン) Preventable (防げる) Diseases (病気) のことです。先進国といわれる日本ですが、ワクチンに関しては発展途上国で、他の先進国に比べて 10 年も 20 年も遅れています。とても子どもに優しい国とは思えません。

感染症は小児科の病気の中で大部分を占めるものでしたが、ワクチンの出現により感染症自体は減ってきています。たとえば麻疹(ましん)はほとんど診ることのない病気になっていて、若い小児科医では診断できないこともあります。しかしながらどうしても減らないものがあります。それはおたふくかぜや水ぼうそうなどの定期接種になっていない病気です。集団生活をするとう感染してしまう病気ですが、自然に感染した方が免疫の付きがいいとか、ワクチンが任意であるのでしなくてもいいという間違った考えが広まっていて、感染者数は減っていません。おたふくかぜは難聴を起こしたりしますし、水ぼうそうも脳炎などを起こし死亡することもあります。

世界の中にはとてもたくさんの感染症があり、その中で予防のためのワクチンが開発されている病気はごく少数です。それが VPD です。たとえばヒブワクチンというものがありますが日本では 2008 年 12 月に発売されました。ヒブとはヘモフィルス・インフルエンザ菌 b 型のことで、細菌性髄膜炎の 60% を占める細菌です。5~10% で死亡し、後遺症が 30% 程度起こります。最近当院でもヒブ髄膜炎の子どもを経験しましたが、ワクチンさえしていれば感染しなかったのにと非常に残念に思いました。アメリカでは 20 年以上前からヒブワクチンが定期接種として打たれていて、ヒブ髄膜炎はほとんどなくなっています。しかし日本では毎年 600 人もの子どもがこの病気になっているのです。

また予防できるがんとして最近話題になっている子宮頸(けい)がんワクチンも VPD の一つです。完全に予防できるわけではありませんが検診と合わさればかなり有効なのです。

このように日本では欧米などに比べて VPD による健康被害は非常に多いのです。接種率の低さもありますが VPD についての情報の少なさも原因です。ワクチンにもっと目を向けてもらうことが必要です。任意のワクチンはしなくていいのではなく、した方がいいという当たり前のことをもっと多くの人に知ってほしいのです。テレビや新聞は正しい情報を多くの人に伝えてほしいと切に思います。また制度的にも任意の予防接種を定期の接種に変えてもらい、生まれてくるすべての子どもの健康を守ってほしいと思います。

「VPD を知って、子どもを守ろう」というホームページ

(<http://www.know-vpd.jp/index.php>) があるので、見ていただければ幸いです。

愛媛新聞「健康ファイル」

平成 22 年 12 月 14 日(火)掲載